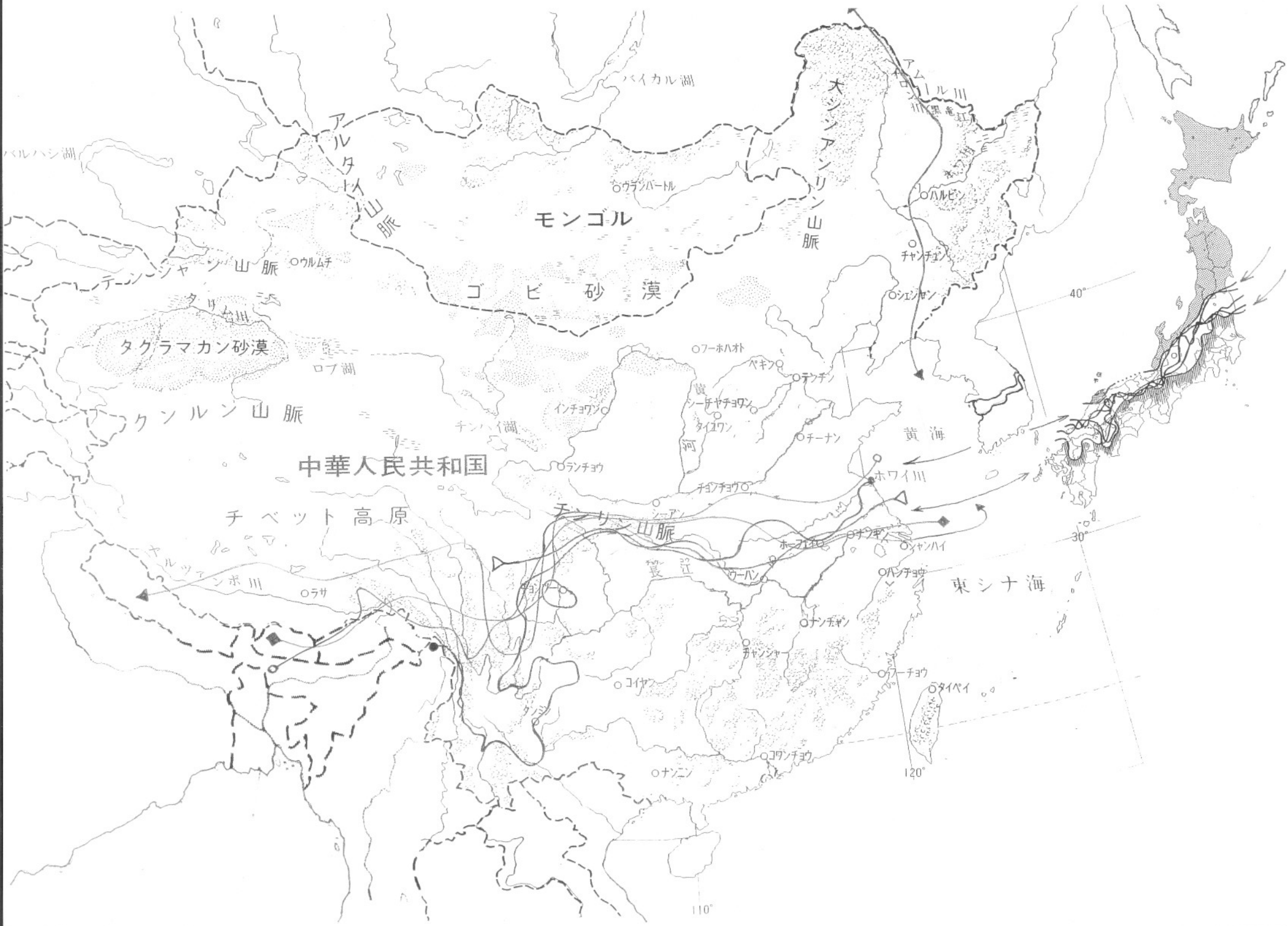
バイカル湖
バルハシ湖
アルタイ山脈
モンゴル
ウランバートル
大シンアンリン山脈
アムール川
黒龍江
ハルビン
チャンチュン
シェンヤン
テンシャン山脈
ウルムチ
ゴビ砂漠
タリム川
タクラマカン砂漠
ロプ湖
クンルン山脈
フーホハオト
ペキン
テンチン
黄河
シーチャチョワン
タイユワン
インチョワン
チンハイ湖
チーナン
黄海
中華人民共和国
ランチョウ
ホワイ川
チョンチョウ
チベット高原
チンリン山脈
シェアン
ホーフェイ
ナンキン
シャンハイ
揚江
ウーハン
ハンチョウ
東シナ海
ヤルツァンポ川
ラサ
チョンチン
ナンチャン
チャンシャー
フーチョウ
タイペイ
コイヤン
タンジ
コワンチョウ
ナンニン
40°
30°
120°
110°

表４「総合性優位方言（外日本）／分析性優位方言（中日本）」の機能類型（Ⅳ）
東アジア言語内方言間の「体系的音韻対応の法則・三対」　（安部1999）

位置	列島中央部	両　唇	両唇 軟口蓋 声門	歯茎	東ユーラシア中南部
言語	日　本　語	破／鼻	破接近/破・摩・接近	破/弾・鼻	東アジア言語音
方言	外日本方言	b	(k←)　*k w	d	ｱﾙﾀｲ系音・中国北方系音
地域	中日本方言	m	(p→Φ→)h ⋮ ɦ	j・r・n ⋮ n	中国南方系音

注１　日本語にもｄ－ｎ交替の片鱗が認め得る。シダ（東国・肥前）／シナ(時)［地理的にも一致］、ダ(木ダ物・毛ダ物)／ナ(の)、マタ（mada・mat'a)／マナ（眼、マナ・コ→マ・ナ・コ）など。
注２　ｂ－ｍ交替では、12c.『悉曇要決』にボリ(越中越後)/モリ(森)等もある。
注３　ｄ－ｒ/ｊ交替では、上代「ゆ・らゆ」と中古「る・らる」、「てんちう(天竜川）」『更級日記』、ココダ/ココラ、カハヅ/カヘル、タヅ/ツル等も、該当事例と位置付け得る。

表５ 東アジアの言語に見られる「音韻対応の法則（傾向)」(仮説)(安部1999)
Three Pairs of 'Sound Correspondence' in East Asian Languages (ABE1999)

東アジア地域 East Asian Lang.	両唇音 Bilabial	歯茎音 Alveolar	唇音・軟口蓋音・声門音 Labial・Velar・Glottal	［破裂音］ Plosive
北 方 子 音 North Consonant	b ———	d ———	k w	＋
南 方 子 音 South Consonant	m	－(ｊ・ｒ・)ｎ／ｎ	—（ｐ・Φ・)ｈ／ɦ	－
［暗 音　Grave］	＋	－	＋	

表６ 東アジア古層言語の「音韻対応の法則」の理論的再構成(試論)(ABE2000)
Three Pairs of 'Sound Correspondence' in Ancient East Asian Languages

東アジア地域 EastAsianLang.	両唇音 Bilabial	歯茎音 Alveolar	唇軟口蓋音／声門音 Labial Velar/Glottal	DistinctiveFtr. Oral ／ Nasal
北 方 子 音 NorthConsonant	b ～*p'	— d ～*t'	— *gw ～ k'w	［Oral　口音性］ Plosive 破裂音
南 方 子 音 SouthConsonant	↳mb m	↳nd — n	—　*ŋw(~*ɣ)~ɦ	［Nazal 鼻音性］ Nazal　鼻 音
地域的変異層 Local Strata	North C. South C.	└r └j	└p→ Φ →h	Effect of Other Stratum on C.

注１　日本語・韓国語に見られるｔ(ｄ)－ｒ(ｌ)(己）対応（例、蜂)も、この対応に間接的に関わり、祖語形＊p'adi(～*ba・t'i)→ pati(日)／pöl(韓)と推定される可能性が認め得る。この点から見ても、表６のｄ～＊ｔ'－ｒ対応は、この日・韓の対応とパラレルな関係にある可能性が推定される。
注２　地域的変異音のｒ、ｊ、ｐ～Φの３者は、異なる理由（異層語）によるものである蓋然性が高い。
注３　ｐのｈ化の背景として、底層語の*ŋw～ɦの影響の可能性が指摘できる。
注４　アイヌ語の研究からは、子音ｂ・ｄ・kw・ｇ・ŋのいずれも確認できない。一方、そのｍ・ｎ・ｈ・ｐ・ｊの子音は上記南方子音の方に見られる特徴であり、アイヌ文化に関する南方性の指摘を考慮すると興味深い傾向である。
注５　《北方子音［破裂・有声音］／南方子音［鼻音］》という特徴は、12c.『悉曇要決』「本朝北州／其音濁麁矣。／南州其音柔也。」と一致する。一方、「子音性優位／母音性優位」の対立特徴として指摘される東日本側（特に関東東北）での［語気・呼気の強さ］［アクセントの強さ］［有声化］とも類似する。－「《談話の速度がはやい》従って《語気が強い》(楳垣実1961)」「呼気が強めで子音が優勢／アクセントにおいて強さの要素の割合が高まる傾向(上村幸雄1986)」「言語発音に急速感が感じられ／濁音化の著しい現象。(藤原与一1990)」－この特徴は、南西諸島等に対しても一部指摘されているので、単純に「北方南方」と同列には扱えないが、興味深い類似性である。